

プラトン《魂の三分》説とデュメジル《三分イデオロギー》説

——インド・ヨーロッパ語族民における歴史通貫的な統治原理——

中川 洋一郎

はじめに——なぜ、いま、プラトン『国家』論か

- I. プラトン『国家』論の概要とその時代背景
- II. 《三分イデオロギー》の表出としてのプラトン『国家』
- III. ソクラテスとトラシマコス論争
- IV. 二つの統治原理——専制君主制国家と「善き羊飼ひ」的温情国家
- V. 《三分イデオロギー》の現実への適用としてのプラトン『国家』論
おわりに——調和の実現こそ、プラトンにとって「正義」であった

はじめに——なぜ、いま、プラトン『国家』論か

ホワイトヘッドによる「ヨーロッパの哲学的伝統の最も無難な一般的性格づけは、プラトンに対する一連の脚注から構成されているもの」（ホワイトヘッド1979：43）という、あまりにも有名な評価を待つまでもなく、古代ギリシャの哲学者、プラトン（前427-前347年）は、西洋哲学史における主要な源泉の一つである。『国家』は彼の代表的著作であり、後世の政治思想に多大の影響を及ぼした。中でもその理論的根拠となったのが、《魂の三分》説である。

一方、現代フランスの神話学者ジョルジュ・デュメジル（1898-1986年）は、インド・ヨーロッパ語族に属する各民族の神話研究から導き出した祖神話における神々の構造を抽出して、《三分イデオロギー》¹⁾ という考えを提示した。デュメジルは、かかる《三分イデオロギー》は、ヨー

1) 《三分イデオロギー》とは、フランス語での *Idéologie tripartite* の訳である。ほぼ同じ意味で、《三機能イデオロギー》も使用されるが、こちらは *Idéologie trifonctionnelle* の訳である。この学説を提唱したジョルジュ・デュメジルは、両方とも使用している。今日では、《三分イデオロギー》がはるかに頻繁に使われていて、使用頻度の点で通常の用語となっている。両者は大きな枠組みではほぼ同じ意味を持つと理解されていて、検索サイトなどでは、互換的に扱われている。しかし、筆者の見るところでは、《三分イデオロギー》は、三つの部分が水平的に分かれているという表象を与えるのに対して、《三機能イデオロギー》では、機能によって三つの部分に分かれているという表象を与えている。しかも、この場合、三つの部分のそれぞれに属する機能には、その性質の違いと同時に、その価値の軽重があるので、この《三機能イデオロギー》という名称では、三つの部分は上下関係にある

ロッパ文明の基底に流れる思想的な核であり、その後も折に触れて出現して、宗教・思想はもとより、芸術・文化、さらに社会的な組織面でも大きな影響を与えたと考えていた。とりわけ、デュメジルは、古代ギリシャには《三区分イデオロギー》の発現事例は多くないが、しかし、プラトンの国家論ほど典型的な出現事例は希有であると述べていた²⁾。

かくて、デュメジルと、彼の説に共鳴する人々にとって、プラトンの『国家』を支える思想の背景には《三区分イデオロギー》が流れていることに、疑問の余地はない。これまでさまざまに議論されてきた『国家』をめぐる「謎」の多くも、愚見によると、「そこに表出されたプラトンの思想は《三区分イデオロギー》の適用であり、応用である」ことを前提に吟味して考察すると、その多くは氷解する³⁾。しかし、いささか奇妙なことに、日本の学会で、「プラトンと《三区分イデオロギー》との関係いかん」という問題が論じられたことは、寡聞にして知らない。プラトンの『国家』あるいは《魂の三区分》説が、《三区分イデオロギー》との関連で論じられた形跡が見つからないのである。これは、筆者がプラトン研究の門外漢なので、おそらく研究史に無知ゆえなの

ことが潜在的に含意されている。そのため、筆者は、この意義の方が適切だと考えるので、普段は《三機能イデオロギー》を使用している。しかし、本稿では、プラトンの《魂の三区分》説を検討するので、それと平仄を合わせるために、《三区分イデオロギー》を採用した。

2) Programme Radio "Rencontres Spirituelles" 1964. <http://www.dieu-parmi-nous.com/R/DUMEZIL.GEORGES-1.mp3>; <http://www.dieu-parmi-nous.com/R/DUMEZIL.GEORGES-2.mp3>.

3) 例えば、山川明子は、「プラトンは、なぜ魂をあえて三つに区分したのか。実は二分法であったという解釈が存在することからもわかるように、『理性的部分』『欲望的部分』の二つで十分ではなからうか。国家とのアナロジーを完成させるためやむなく三分割しなくてはならなかったのだろうか。だが、国家とのアナロジーは、実は『国家』の目的ではなかったことはすでに述べた。むしろ、魂の考察にその目的はあるのだ。このことから、やはりプラトンは魂を三分割することを念頭に置いた上で、まず国家の成員を三区分したのだと考えられる。……すべての感情に魂の部分をあてがっていたら三区分ではすまなくなるが、理性を補佐するものとして、感情の中で唯一『怒り』が選ばれた理由については、なお考察の余地がありそうである」(2008: 95-96)と、プラトン『国家』で感じた当惑感を正直に開陳している。確かに、これまで積み重ねられてきた膨大なプラトン研究では、「プラトンは、なぜ、魂を三区分したのか。二つでもよいではないか」という設問に対しても、考察がなされてきた。しかし、研究史に門外漢の筆者からすると、この設問に対して、論理の内在的な整合性で答えようとする議論は徒労に終わると思う。「《魂の三区分》説の基礎には、《三区分イデオロギー》説がある」という筆者の仮説から、上記の山川明子の問いかけに対しては、端的に、「魂が三区分されているのは、プラトンが《三区分イデオロギー》を下敷きにしているからである。《三区分イデオロギー》は初期遊牧組織における三階級構造という現実的な基礎を持っていたが、しかし、すでにその生成から3000年を経過した前1千年紀半ばのギリシャという先進的な先住民文化を誇る当時の先進文明地帯では、そのまま露骨に初源的な《三区分イデオロギー》を国家論に応用することはできなかった。なぜ三つかと問うことは大事だが、問題はすでにもっと先に行っていて、《三区分イデオロギー》を現実に応用して国家論を構築しようとした際に、プラトンは、何を保持して、何を棄てたのかと問うべきではないか」と答えられる。また、例えば、中畑正志(1992)は、これまでのプラトン「魂の三区分」説に関する研究では、四つの系列の問題設定がなされていると考えている。

だろう⁴⁾。しかし、さはさりながら、プラトンという西洋哲学の源泉の一つと、《三区分イデオロギー》というインド・ヨーロッパ語族民の基底的思想とが、いかに切り結んでいたのか（あるいは、いないのか）について、このまま等閑視することは、現代世界において標準的な文明となったヨーロッパによる世界制覇の根源理解という知的課題において、ある種の欠落部分を残すのではないかと危惧せざるをえない。

愚見によると、《三区分イデオロギー》は、前5千年紀にユーラシア・ステップで始まった初期遊牧における三階級構造（牧夫→イヌ→ヒツジ）が原インド・ヨーロッパ語族民によって抽象化された部族民の集団的共有観念であったが⁵⁾、本稿では、「かかる即自的な統治原理が、その形成後、3000年を経て、遠くギリシャの天才哲学者プラトンによって、具体的な国家論として現実へと適応の道が模索され、対自的な形態へと対象化された」と提起していく。

I. プラトン『国家』論の概要とその時代的背景

『国家』は、プラトンの代表的な著作であり、全編が対話で綴られている。登場人物としては、プラトンの師であるソクラテスが、ポレマルコス、ケパロス、トラシュマコスらを相手に、全編、多彩なテーマに関して、対話を繰り返している。藤沢令夫によると、本篇に盛られた一連の「対話設定年代は、前421年のニキアスの平和の年、またはその前年の休戦の年（前422年）」であろう（藤沢 1979: 452）。つまり、本書の対話設定の年代は、ペロポネソス戦争が、前431年にアテナイを中心とするデロス同盟とスパルタを中心とするペロポネソス同盟との間に勃発して、10年経過して結ばれたつかの間の休戦期間となる。ペロポネソス戦争は、前404年に、アテナイが降伏して、終結する。戦争中の前427年生まれのパラトンにとって、終結時に23歳であった彼の誕生から物心が付く人間形成期は、まさに戦時体制下にあった。

一方、プラトンが実際にこの著作を執筆したのは、「われわれが今日有する『国家』篇は、これ

4) もちろん、《魂の三区分》説が『国家』の理論的支柱になっているというのは、次の説明のように、定説である。しかし、《魂の三区分》説が《三区分イデオロギー》といかなる関係にあるかは問われていない。「プラトンの中期著作『国家』で展開される議論の多くは、『魂の三区分説』を陰に陽に前提としている。徳や行為のみならず、人間と国家の諸類型や変容過程もこの説に基づいて説明されており、また教育論や快樂論の局面、いわゆる『詩人追放論』の正当化にも三区分説が援用されているとみられ、意図されている理論的射程は相当に広い。本稿のねらいは個別的問題の解決にはなく、この説の基本的特徴の再考を通して、こうした広い射程を見据えるための定点を確認することにある」（西尾 2002: 93）。

5) このテーマは、本稿では議論の対象としていない。概括的にはあるが、中川（2017d）第2部「ヨーロッパ文明の地下水脈としての遊牧」（pp. 63-168）で論じているので、ご参照いただければ幸いです。

だけの長篇であるから当然かなり長期にわたる執筆を考えなければならないが、しかしその成立年代は大体のところ、前375年ころを中心に考えればよく、プラトンが50歳から60歳ころまでの間に書かれた著作であるとみなすことができる。これは、プラトンがイタリアとシケリア（シシリー）への旅からアテナイに帰って、学園アカデメイアを創設（前388／7年、40歳ころ）してから、10年以上たった後の時期である」（藤沢1979：433）。

従って、この書物が書かれた背景には、ペロポネソス戦争というアテナイ・スパルタの雌雄を賭けた30年近くの戦争と、師ソクラテスの不条理な刑死という、苛酷な現実が背景にあった。

この対話篇の主題は、国家（国制）論と正義論である。「主題が二つあるという意味ではなく、これら二つは互いに同一の事柄であるという意味である。なぜならば、一個人の魂において正義であるところのものが、そのまま、良く統治された国家において正しい国制をなすところのものにほかならないからである」（藤沢1979：466）。

国の崩壊という厳しい現実世界の中で、知識人たちの困窮が極まっていた。その中で、「国づくりの中心は、国の守護者・統治者の人づくりにある。まず、幼少年時代に行なわれるべき詩歌・音楽・体育による教育のあり方が検討される（第二、三巻）。そして、国の守護者の資格と選抜、その生活条件と任務が語られてのち、国家を構成する三つの階層の区別とそれぞれの役割にもとづいて、まず国家のもつべき〈知恵〉〈勇氣〉〈節制〉〈正義〉の四徳が定義され、さらに、国家の三階層に対応する個人の魂の三つの「部分」（機能）の区別が指摘されることにより、個人のもつべき同じ四徳が定義される（第三、四巻）」（藤沢1979：456）というように、正義を体現した理想の国家とはどうあるべきかというのが、この『国家』の主題であった⁶⁾。

6) 以上、プラトン『国家』が書かれた社会的背景とソクラテスやプラトンが過ごした当時の状況に関しては、岩波文庫版の『国家』の訳者である藤沢（1979）や、ペロポネソス戦争の経過を絡ませて、ソクラテスの生涯を概観している和田（2014）や、高橋・内海（2011：16-17）などを参照した。藤縄（1975：85）によると、ペロポネソス戦争を契機に、困窮する知識人が増えた。中でも、明石（2014：19）によると、「ペロポネソス戦争の過程における道徳的頹廢やアテナイの没落の経験を通して、その超克を意図したプラトンを初めとするBC4世紀の哲人や知識人は、国政への参加を忌避しながら精神的な生活に逃避し、一神教的態度への志向性を強めた。『国家』も『法律』も理想的哲人による一神教的支配の構図であり、それは理想的展望というよりはむしろ、ギリシャ世界の絶望の裏返し表現のようにも見える。ペロポネソス戦争の敗北、つまり敗北する筈のない文化的優位性を保ちながら、文化的に『いやしい』スパルタによって暴力的な敗北を経験したあとのアテナイ人は、たとえスパルタがベルシャの財政的援助をうけていたものであったにせよ、この世の目的が戦いの『勝利』ではないことを経験せざるをえなかった。勝利を世界の筋書きの結末として描くことが出来なくなったアテナイ人は、戦いにおける結果を不問にする形で、『最善の努力を尽くした』ということに意義を見出す以外に、アテナイの存在意義を守る活路はなかった」。

II. 《三分イデオロギー》の表出としてのプラトン『国家』

1. ジョルジュ・デュメジルの《三分イデオロギー》説

《三分イデオロギー》とは、ジョルジュ・デュメジルが諸民族の神話の研究をもとに提起した学説である。その要点は、「原インド・ヨーロッパ語族民だけがその神話において、神々は、上位から順に、《主権→戦闘→生産》という三つの機能を有する」という主張である。

デュメジル理論は、1950年頃までは、簡潔に以下のように要約できる⁷⁾。

- (1) インド・ヨーロッパ語族民の神話では、神々は三分される。
- (2) 神々は、上位から順に《主権→戦闘→生産》という、異なる機能を有する。
- (3) かかる《三分イデオロギー》には、何らかの社会的背景がある。

つまり、三つの機能は、それぞれ明瞭に分かれていて、別々の神に個体化されていて、三つの機能は全体で一つに完結しており、しかも、それらの上下が厳しく決められているというのであるから、デュメジルの《三分イデオロギー》説で論じられているのは、三機能の分離排他性・相互補完性・上下階級性である。この《三分イデオロギー》の規定は、この限りで、非常に特異である。機能分離性・相互補完性・上下階級性という規定も特異であるが、実は、その背景にある現実が特異なのだと考えられる。もともとこの集団的共有観念はイデオロギーとして想定されたのだから、それを現実へ適用するには、創意工夫が必要であったはずである。プラトン哲学の国家論はその現実への適用における営為の一環ではなかったか。

この《三分イデオロギー》説に関しては、その説に肯定的な議論と、もう一方では、その説に否定的な議論があり、今日まで膨大な研究史を形作っている⁸⁾。ただ、いささか不思議なことに、ヨーロッパ知識層は、この世界を理解しようとするとき、感覚的には、ごく自然に三階層に分けて考える傾向にある。ヨーロッパ人は、世界という総体を何かと三分することを志向し、三つ

7) 《三分イデオロギー》に関する解説として、少し古いが、リトルトン（1981：8-24）に手際よく説明されている。デュメジルは、当初は、神々の世界も、人間の社会も、互いに補完的で階層化されている三つの機能に分かれていたと考えていたが、やがて1950年頃に、この考えは放棄した。

8) 本稿では否定論を細かく紹介できないが、概略で、以下の通りの議論が実施されてきた。原インド・ヨーロッパ語族民の神話すべてに必ずしも三構造を確認できないので、三構造は、インド・ヨーロッパ語族民の神話のすべてにあるのではない。インド・ヨーロッパ語族民以外の神話にも三構造がある。だから、むしろ三機能は普遍的に存在する。三という数字はどこにでもある。神話世界は余りにも現代とかけ離れているので、6000年という時空を超えて、神話が生き延びたという証拠がない。イデオロギーが先行して、社会・経済構造を決めるのはおかしい（マルクス主義サイドからの批判・非難）などの否定的議論が繰り返された。中でも、最大の難点は、原インド・ヨーロッパ語族民は、神話形成時には部族形態で暮らしていたので、階級には分かれていなかったことである。つまり、《三分イデオロギー》を裏付ける三階級構造という社会的な実体はなかったのである。

に分けて、理解することが多いように思われる。例えば、オーストリアの思想家、ルドルフ・シュタイナー（1861-1925年）などが典型的事例だと思われるが、ヨーロッパ人はその根本的な思想的安定を求める時、（1）世界を三層構造で考える。（2）その三層構造は、統括（主権・法・神事など精神的な至高の支配力）・武力（暴力・規制力など実体的な強制力）・生産（労働・豊穡など物的な供給力）からなっている。（3）これらの三つの要素は、必ず主権→強制力→生産という序列になっていて、その価値の大きさも、この序列になっている⁹⁾。

2. プラトン《魂の三区分》説における《三区分イデオロギー》の存在

藤沢令夫によると、当時からすでに、プロクロス（5世紀の新プラトン学派の哲学者）が「国家の三階層と魂の三区分という、国家と個人の魂との構造上の対応」¹⁰⁾ 関係があると指摘していた。では、《魂の三区分》は、《三区分イデオロギー》と、これまた対応関係にあるのかどうか。《三区分イデオロギー》がプラトンの『国家』の中で、どのように表れているのか、それとも、そもそも無関係なのか。

1) 三機能の分離排他性

プラトンは、『国家』第4巻で、ソクラテスの口を借りて、魂は、理知・気概・欲望に三区分されると述べている。

9) シュタイナーによると、「まず始めに序論として、社会有機体の三分節化の基本理念そのものを要約して述べておこうと思います。昨日は私たちの社会の生活要求が三つの基本要素から生じてきていること、つまり、社会問題が精神問題、国家＝法律＝政治問題、および経済問題の三つから成り立っていることを説明いたしました。近代社会の発展過程が洞察できれば、この三つの生活要素、つまり精神生活、法律＝国家＝政治生活および経済生活が次第に混沌とした状態で現代に到り、もはや相互に区別のつかないものになってしまっていること、そしてこの混沌とした状態のなかから現代の社会悪が生じていることを理解するでしょう」（シュタイナー 2009：39）。シュタイナーが、ここでは、法的権力を第二階層に入れていることに留意するべきであるが、それにしても当たり前のように、特段の論証をする必要性を感じることなく、「世界の三階層構造」をもとに社会を語るのは、その素養として、底流にプラトンの哲学があるからであろうか。なにしろ、ホワイトヘッドによると、「西洋哲学は、プラトンへの一連の脚注だ」というくらいなのだから。

10) 「プロクロスがこのことの説明のために指摘するのは、いうまでもなく、国家の三階層と魂の三区分という、国家と個人の魂との構造上の対応である。そして、これが真実であるとすれば、〈正義〉について説く人は、その説き方が完全であるかぎり、〈国制〉について説くことになり、正しい〈国制〉について論じる者は、同じくその論じ方が不完全でないかぎり、必ず個人の内なる国制であるところの《正義》について論じることになるはずだ、と主張する」（藤沢 1979：466）。正義とは、正しい理に従って生きる魂の国制である。「国家論を通じて〈正義〉の何であるかを問い、それと幸福との関係を問うこと、これが、議論の進行の実態によって示される本篇の中心テーマであるといわなければならない」（藤沢 1979：468）。

「〈気概の部分〉についてのわれわれの見方が、ついさっきとは反対になっているということだよ。つまりさっきは、われわれはそれを欲望的な性格をもった何かであると考えたわけだが、いまはそれどころか、魂の中で起る紛争にあたって、むしろはるかに〈理知的部分〉に味方して武器を取るものだと主張しているのだからね」

「まったくそのとおりです」と彼は答えた。

「そうするとそれは、その〈理知的部分〉とも別のものなのだろうか、それとも〈理知的部分〉の一種族であり、したがって魂のなかには三つではなく二つの種族のもの——すなわち〈理知的部分〉と〈欲望的な部分〉と——があるだけだ、ということになるのだろうか？ それとも、ちょうど国家において、金儲けを業とするもの、統治者を補助する任をもつもの、政策を密議する任に当るものという、この三つの種族があって一国をまとめていたのと同じように、魂の内においてもまた、この〈気概の部分〉は第三の種族として区別され、悪しき養育によってだめにされないかぎり、〈理知的部分〉の補助者であることを本性とするものなのであろうか？」

「それはどうしても、第三のものとして区別されなければならないでしょう」と彼は答えた（440E-441A）。（プラトン 1979a : 358-359）

プラトンは、ここでは戦闘を担う〈気概〉について、「第三のものとして区別されなければならない」と述べている。先に見たように、デュメジルの《三分区イデオロギー》説では、主権→戦闘→生産と、それぞれの機能を担う部分は別々にあり、自律している。この部分は、まさに「三機能の分離排他性」を謳うという限りで、《三分区イデオロギー》の重要な性格の表出と言うべきであろう。

さらに、三つの「種族」はそれぞれよその「種族」の仕事に手出しはならない（つまり、排他性）と、ソクラテスは、グラウコンに語っている。

「しかしながら、思うに、生まれつきの素質において職人であるのが本来の人、あるいは何らかの金儲け仕事をするのが本来である人が、富なり、人数なり、体の強さなり、その他これに類する何らかのものによって思い上ったすえ、戦士の階層のなかへ入って行こうとしたり、あるいは戦士に属する者がその素質もないのに、政務を取り計らって国を監視・守護する任につこうとしたりして、これらの人々がお互いの仕事道具や地位を取り替える場合、あるいはまた、同じ一人の人間がこれらすべての仕事を兼ねて行なおうとするような場合は、こうした階層どうしのこのような入れ替りと余計な手出しとは、国家を滅ぼすものであるということに、君も同意見だろうと思う」

「ええ、完全に同意見です」

「してみると、三つある種族の間の余計な手出しや相互への転換は、国家にとって最大の害悪であり、まさに最も大きな悪行であると呼ばれてしかるべきだろう」

「まさにそのとおりです」(434A-C)。(プラトン 1979a : 336-337)

プラトンは、ソクラテスの口を通じて、「三機能は、三つの別の種族に分かれて担われなければならない」と言っている。従って、ここには、三つの機能の分離性(個性・排他性)が明瞭に謳われている。もちろん、一方では、その区分は不明瞭であり、ある種族が他の種族の機能を有することもできるのではないかという疑問も提起されている¹¹⁾。

《三区分イデオロギー》説によると、三機能は、それぞれ別の主体に担われ、互いに排他的であるはずである。職務共有の日本型企業組織では小集団活動が盛んであるのに対して、職務個体化の欧米型の企業組織においては、現場からの提案に対して、上位の管理者は否定的である(中川 2017c)。このことは、欧米型企業では「機能の排他性を推し進めることの重要性」を意識し、組織編成原理の核に据えていることを意味しているが、では、はたして、6000年の時空を超えて、《三区分イデオロギー》が欧米型組織に影響を与えているのであろうか。

2) 三機能の相互補完性

魂の三区分と国家における三階級との類似性を語る以下の引用文で、プラトンは、「節制のある人こそ、理性的部分が他の二つの部分を支配し、全体の調和を取れる人物だ」、あるいは、「正義こそが全体の調和だ」と述べている。三機能の相互補完性について、明確に述べている個所だと考える。すなわち、「自分の内なるそれぞれのものにそれ自身の仕事でないことを許さず、魂のなかにある種族に互いに余計な手出しをすることも許さないで、真に自分に固有の事を整え、自分で自分を支配し、秩序づけ、自己自身と親しい友となり、三つあるそれらの部分を、いわばちょうど音階の調和をかたちづくる高音・低音・中音の三つの音のように調和させ、さらに、もしそれらの間に別の何か中間的なものがあればそのすべてを結び合わせ、多くのものであることをやめて節制と調和を堅持した完全な意味での一人の人間になりきって」(443D-E) (プラトン 1979a : 367-368) と述べて、プラトンは、「正義は何かしら個別的なものの中ではなく、何か全体的なものの中に見いだされる。それぞれ異なったものが集まって、調和の取れたひとつの全体となる所に、正義は見いだされる」と主張している¹²⁾。

11) 西尾浩二は、以下のように、三機能の第一の性格、すなわち、分離排他性に関して、疑問を呈している。「では以上のように区分論の輪郭を描き出すことができたでしょう。だが次のような疑問が生じるかもしれない。理性的部分だけでなく、実は下位部分も善悪の価値判断をもつのではないか、そしてもしそうなら、上の解釈に従えば、欲望的部分の内にも理性的要素が内在することになり、理論は破綻に追い込まれるのではないか」(西尾 2002 : 96)。

12) 「してみると、われわれの夢は完全に実現されたわけだ、ほら、われわれは国家の建設を始めるとすぐに、何らかの神の導きによってか、〈正義〉の原理を示すようなある形跡のなかに踏みこんだらしい、

魂は、人間の心のことなので、それ自体で一体性・完結性がある。国家を魂に準えることで、国家の一体性・完結性を理論的に保証することになる。節制のある人、あるいは正義の正体とは、「三機能の一体性あるいは完結性」を意味している。つまり、『国家』で述べられた魂の三分区こそ、《三分区イデオロギー》説の肯定であり、現実への適用事例である。

3) 三機能の上下階級性

プラトンは、『国家』のいたるところで、三機能の序列について語っている¹³⁾。その代表的な部分

と言っていたあの推測のことだよ」

「ほんとうにそうですね」

「ただし実際には、グラウコン、それは——だからこそ役にもたったわけだが——〈正義〉の影ともいべきものだったのだ。生まれつきの靴作りはもっぱら靴を作って他に何もしないのが正しく、大工は大工の仕事だけをするのが正しく、その他すべて同様であるという、あのことはね」

「そのようです」

「真実とはいえば、どうやら、〈正義〉とは、たしかに何かそれに類するものではあるけれども、しかし自分の仕事をするといっても外的な行為にかかわるものではなくて、内的な行為にかかわるものであり、ほんとうの意味での自己自身と自己自身の仕事にかかわるものであるようだ。すなわち、自分の内なるそれぞれのものにそれ自身の仕事でないことをするのを許さず、魂のなかにある種族に互いに余計な手出しをすることも許さないで、真に自分に固有の事を整え、自分で自分を支配し、秩序づけ、自己自身と親しい友となり、三つあるそれらの部分を、いわばちょうど音階の調和をかたちづくる高音・低音・中音の三つの音のように調和させ、さらに、もしそれらの間に別の何か中間的なものがあればそのすべてを結び合わせ、多くのものであることをやめて節制と調和を堅持した完全な意味での一人の人間になりきって——かくてそのうえで、もし何かをする必要があれば、はじめて行為に出るといことになるのだ。それは金銭の獲得に関することでも、身体の世話に関することでも、あるいはまた何か政治のことでも、私的な取引のことでもよいが、すべてそうしたことを行なうにあたっては、いま言ったような魂の状態を保全するような、またそれをつくり出すのに役立つような行為をこそ、正しく美しい行為と考えてそう呼び、そしてまさにそのような行為を監督指揮する知識のことを知恵と考えてそう呼ぶわけだ。逆に、そのような魂のあり方をいつも解体させるような行為は、不正な行為ということになり、またそのような行為を監督指揮する思わくが、無知だということになる」

「まったくのところ」と彼は言った、「ソクラテス、あなたのおっしゃるとおりです」

「よかろう」とぼくは言った、「これで、正しい人間も、正しい国家も、そしてそれらのなかにある〈正義〉とはまさに何であるかということも、われわれは発見しおえた」と主張するとしても、思うに、まんざら嘘を言っているともみなされまいだろうね」

「ええ、ゼウスに誓ってけっして」と彼は答えた（443C-444A）。（プラトン 1979a : 367-368）

- 13) 「理知的部分は真実や知を愛する部分で学びの機能ももつが（581b）、ここでは下位部分との関係を見るために、支配機能に考察の照準を合わせる。『理知的部分には、知恵があって、魂全体のために配慮するものであるから、支配するという仕事が本来ふさわしい』（441e 4-5）とされるように、下位部分を『支配する』という上位の位置づけは、理知的部分に備わる『三つの部分のそれぞれとその共同体〔魂全体〕にとって何が利益となるかということの知識〔知恵〕』（442c 6-8）に基づく。このようにある種の知識をもって支配する部分に、『内なる人間』としての特別な地位をプラトンが与えたこ

が以下の個所である。以下は長文の引用だが、三機能の上下階級性だけでなく、分離排他性、さらに、相互補完性も語っているので、「プラトン《魂の三区分》説は、インド・ヨーロッパ語族民に固有の《三区分イデオロギー》の表出である」というデュメジル説にとって核心的部分である。

「そうすると以上の諸点については」とぼくは言った、「われわれはやっとのことで議論の荒海を泳ぎぬいて、国家のなかにも、それぞれの個人の魂のなかにも、同じ種族のものが同じ数だけあるということに、うまく意見の一致を見たことになる」

「そのとおりです」

「こうなるとあのことは、もはや動かぬ必然ではないだろうか——すなわち、国家が知恵ある国家であったのとちょうど同じ仕方で、また国家をそうあらしめたのと同じ部分のおかげで、個人もまた知者であるということは？」

「そうですとも」

「そして個人が勇敢であるのと同じ仕方で、また同じ部分のおかげで、国家もまた勇敢なのであり、その他すべてについて、両者は徳に関し同じあり方をもつことになる」

「必然的にそういうことになります」

「こうしてまた、思うに、グラウコン、人が正しい人間であるのも、国家が正しくあったのとちょうど同じ仕方によるものであると、われわれは主張すべきだろう」

「それもまた、まったく必然的なことです」(441C-D)。(プラトン 1979a : 361)

以上は、「国家の三区分は魂の三区分によって保証される」と主張している個所である。ついで、以下の文で、三機能の分離排他性を確認している。

……「……国家の場合は、そのうちにある三つの種族のそれぞれが『自分のことだけをする』ことによって正しいということだった」

「忘れてしまっているとは思いません」と彼は答えた(441D)。(プラトン 1979a : 362)

プラトンは、続けて、「理知的部分が全体を支配・統括し、気概部分は理知的部分を助けて戦い、両者は欲望部分を注意して監督しつつ支配するべきだ」と三機能の上下階級性を謳っている。

……「そこで、〈理知的部分〉には、この部分は知恵があって魂全体のために配慮するもので

とを、どのように理解すべきだろうか」(西尾 2002 : 98)。これらの他に、プラトン『国家』427e-434d, 433b, 413b, 413d などに、三機能の上下階級性に関する記述がある。

あるから、支配するという仕事が本来ふさわしく、他方〈気概の部分〉には、その支配に聴従しその味方となって戦うという仕事が、本来ふさわしいのではないか」

「たしかに」

「ところで、われわれが言っていたように、音楽・文芸と体育とは、相まって、それらの部分を互いに協調させることになるのではないだろうか？——一方〔理知的部分〕を美しい言葉と学習によって引き締め育くみ、他方〔気概の部分〕を調和とリズムをもって穏和にし、宥めながら弛めることによってね」

「ええ、たしかに」と彼。

「そしてこの二つの部分がそのようにして育くまれ、ほんとうの意味で自分の仕事を学んで教育されたならば、〈欲望的部分〉を監督指導することになるだろう。この〈欲望的部分〉こそは、各人の内なる魂がもつ最多数者であり、その本性によって飽くことなく金銭を渴望する部分なのだ。先の二つの部分はこれを見張って、この部分が肉体に関わるさまざまないわゆる快樂に充足することによって強大になり、自分の為すべきことはしないで、その種族としてはおこがましくも他の部分を隷属させ支配しようと企て、かくてすべての部分の生活全体をひっくり返してしまうようなことのないように、よく気をつけるだろう」(441E-442B). (プラトン 1979a : 362-363)

別々の三つの部分が、一つとなって全体を形成している。これらの三つの部分は、理知→気概→欲望の順に位置している。しかも、理知的部分こそが、他の二つの部分を支配するのが本来のあり方であると、プラトンは主張している。先に見たように、三機能の分離排他性（すなわち、三つの機能は分かれて担われている）・相互補完性（全体が一つになって調和している）・上下階級性（三つの機能は、上から順番に位置づけられている）という《三分イデオロギー》の特徴は、上記のように、プラトン『国家』においてありありと表出されていたと考える。

3. 《三分イデオロギー》の典型的な事例としてのプラトン《魂の三分》説

かつては、ギリシャ神話にはこの《三分イデオロギー》はほとんど見られないと考えられてきたが、デュメジル自身、1941年に *Jupiter Mars Quirinus. I : Essai sur la conception indo-européenne de la société et sur les origines de Rome*. 1941, pp. 257-258で、『国家』について、さらに1955年に“Triades de calamités et triades de délits à valeur trifonctionnelle chez divers peuples in do-européens”, *Latomus*, 14, 1955, pp. 183-185などで追加的に言及して、折に触れてプラトンの『国家』における《三分イデオロギー》の影響について述べてきたが、以下のように、1968年の *Mythe et épopée I* (pp.493-496) で3頁にわたって『国家』第3巻と第4巻における《三分

イデオロギー》の表出を、総括的に述べている¹⁴⁾。

この〔オセットの〕伝説の背後には、異種の、しかし、プラトンのそれに近い政治的心理が見られる。プラトンは、間違いなく非常に古い三機能的思考に基づいて、『国家』の第4巻の冒頭で、この政治的心理を開示している。第3巻末で、支配する哲学者、戦う戦士、富を生み出す農民耕作者・職人を合わせた第三階級という、三階級の概念化を展開したのち、著者〔プラトン〕は、社会が持つべき徳の数々、その各階級への振り分けを論じている(427e-434d)。

—もし、われわれの国家がちゃんと形成されているのなら、国家は完全でなければなりません。

—その通りです。

—そうだとすると、〔哲学者は〕賢明であり、〔戦士は〕勇気があり、〔第三階級は〕節度があり、〔国家は〕正しくなければならないことは、明らかです。

—そう、明らかです。

ソクラテスは、国家の賢明さは、きちんと議論し、きちんと決定できることにあり、大工や鍛冶屋などのような技術的知識ではないので、第一の社会階級のなすべき仕事であると、当然のように述べている。……さらに、ソクラテスは、国家は、その防衛者の階級である戦士において、というのも、まさに『国家のために戦い、戦争するこの部分にこそ』勇気があると、示している。……しかし、節制を論じる番になった時、ソクラテスは意外なことを言っていて、われわれを驚かせる。確かに、この徳は、快楽と欲望に対する通常の秩序と抑制であり、第三階級に相応しいとしているが、しかし、彼らだけではないと述べているからである。……

最後に、それまでの三つの徳とは異質な、正義という徳を定義するだけとなった(433b)。それぞれ〔の階級〕が、よその〔諸階級の〕機能に踏み込むことなく、自分の機能を遂行するという、恒常性こそが正義である。そして、理性・情熱・渴望という三つの諸原則からなる人間の魂を示して、それらの自然的調和を維持するのが正義であるという分析へと移るだけとなる(DUMÉZIL 2014: 493—496)。

続けてデュメジルは、「従って、プラトンの夢は、最善を求めるオセット〔現代まで続くスキタイ系の遊牧民〕の民話の中に生き残ったのと同じイデオロギーに基づいている」と明言した

14) SERGENT (1979: 1175).

(DUMEZIL 2014 : 496). 一方、ベルナル・セルジャンも、プラトンの『国家』(580d-581a)¹⁵⁾を引用しつつ、「インド・ヨーロッパ語族民の三機能について、これ〔プラトンのこの個所の描写〕以上に優れた定義はほとんどない。ここでは、とりわけ第三機能の広がり多様性が、完璧なまでに写し出されている」(SERGENT 1979 : 1175)とまで述べている。

かくて、デュメジルとその説に共鳴する人々にとって、『国家』に表れたプラトン思想が、『三分イデオロギー』の表出であることは疑いない。

Ⅲ. ソクラテスとトラシマコス論争

しかし、デュメジルが言うように、国家の三階級は《三分イデオロギー》をもとにしており、プラトンがその裏付けとして《魂の三分》を援用したとしても、国家であろうが、魂であろうが、そもそも現実に「三つに分かれている」ことの実体的な裏付けはあるのだろうか。《魂の三分》にしても、国家の三階級にしても、内在的論理を精緻に組み上げて、後は「三つに分かれているのだ」という、その論理を、実体的な裏付けを欠いたまま、信念を持って執拗に押し通すしかないのだろうか。

「三つに分かれているのだ」という信念の実体的な裏付けは存在したと思う。愚見によると、今から6000年ほど前に、インド・ヨーロッパ語族民がまだステップにいた頃、初期遊牧組織の三階

15) 「ちょうど国家が三つの種族(階層)に分けられたように」とぼくは言った。「一人一人の人間の魂もまた、それと同様に三つに区分される以上、そのことにもとづいてわれわれの問題は、また別の証明を得ることになるだろうと、ぼくには思われるのだ。……魂に三つの部分があるのに応じて、快樂にも三つのものがあるように思われる。一つ一つの部分が、それぞれに固有の快樂を一つずつもつ、という仕方だね。また同様にして、欲望と支配のあり方にも、三つあることになるう」

「とおっしゃると、それはどのような意味でしょうか？」と彼はたずねた。

「われわれの主張では、魂のひとつの部分は、人間がそれによって物を学ぶところの部分であり、もうひとつは、それによって気概にかられるところの部分であった。そして第三の部分は、多くの姿をとるために、それに固有であるような単一の名前でこれと呼ぶことができずに、それ自身のなかにある最も主要で最も強いものを、この部分の名前として当てることにした。すなわち、われわれはこの部分を、食物や飲み物や性愛やその他それに準ずるものに対する欲望のはげしさにもとづいて、〈欲望的部分〉と呼んだのであった。また〈金銭を愛する部分〉とも呼んだが、これは、その種の欲望が何よりも金の力によって遂げられるからである」

「そしてわれわれがそうしたのは、正しかったのです」と彼は言った。

「そうするとまた、この部分がもつ快樂と愛は利得を目ざしているというふうに言うならば、われわれは議論のうえで、これを最もうまく一つの特性に確実にまとめ上げることができて、魂のこの部分のことを語るときに、その意味がわれわれ自身に明らかになるのではないだろうか。そして呼び名としては、これを〈金銭を愛する部分〉とか(利得を愛する部分)とか呼ぶならば、正しい呼び方になるのではないだろうか？」(580D-581A). (プラトン 1979b : 266-267)

級構造（牧夫→イヌ→家畜群）を観念化して、部族民の集団的共有観念を神話として戴いた。それが《三区分イデオロギー》である。従って、その実体的背景こそ、初期遊牧組織である¹⁶⁾。

プラトンが国家統治について考察する際に、ヒツジの群れを飼養する牧夫という表象を持っていたのは間違いない。例えば、彼の後期の著作『ポリティコス（政治家）』には、しばしば牧夫・ヒツジ関係が政治家と彼らによる国家統治の議論に際して言及されている¹⁷⁾。しかし、これはいかなる意味なのか。

1. トラシュマコスの牧夫・ヒツジ論

その点、ソクラテスがトラシュマコス（およそ前459-前400年）と交わした議論がきわめて興味深い。プラトン『国家』における、重要な議論がソフィストのトラシュマコスとソクラテスの議論である。プラトンには、牧夫を人間社会における指導者になぞらえて国家を考えるという発想があった。

『国家』第1巻で、トラシュマコスは、牧夫・ヒツジを題材にソクラテスに挑んでいる。

〔トラシュマコス〕「……おかげで、あんた〔ソクラテス〕ときたら、羊も羊飼いも見わけさえつかぬありさまではないか」

「いったい全体、何かどうしたというのだね？」とほく〔ソクラテス〕は言った。

「ほかでもない、あんたは、羊飼いや牛飼いが羊や牛たちのほうの為をはかるものなどと考え、彼らが羊や牛を肥らせ世話することの目標は、主人の利益や自分自身の利益とは別のところにあると思こんでいるからだ。またとくに、国における支配者たち——ほんとうの意味で支配している人たちのことだが——そういう支配者たちが被支配者に対してもつ考えは、ちょうど人が羊に対してもつ気持と同じだということ、支配者たちが夜も昼も頭をつかっているのは、どうすれば自分自身が利益を得るかということにほかならぬということが、あんたにはわかっていないからだ。

まったく、〈正しいこと〉と〈正義〉、〈不正なこと〉と〈不正〉についてのあんたの考えたるや、次のような事実さえ知らないほど、救いがたいものだ。すなわち、〈正義〉だとか〈正しいこと〉だとかいうのは、自分よりも強い者・支配する者の利益であるから、それはほんとうは、他人にとって善いことなのであり、服従し奉仕する者にとっては自分自身の損害にほかならないのだ。〈不正〉はちょうどその反対であって、まことのお人好しである『正しい人々』を支配する力をもつ。そして支配されるほうの者たちは、自分よりも強い者の利益に

16) このテーマは、本稿の対象ではないので、拙著（中川 2017d）の第2部「ヨーロッパ文明の地下水脈としての遊牧」をご参照いただければ幸いである。

17) プラトン(1976), MERRILL, (2003).

なることを行ない、そして奉仕することによって強い者を幸せにするのであるが、自分自身を幸せにすることは全然ないのである」（343A-D）。（プラトン1979a：72-73）

トラシュマコスの議論は、羊飼いとヒツジとの関係をもとに、粗野な統合原理を語っている。ここでは、「正義とは、強者の利益のことだ」という、有名な言葉が語られている。さらに、「羊飼いは自分自身の利益のためにヒツジの世話をしている」と述べているのは、牧畜という生業を冷静に見れば、正論である。牧夫は、ヒツジを飼養した後、どのみち屠畜して自分たちで肉を食するなり、売ったりするからである。このようなトラシュマコスの議論によると、国家は強者が自己の利益を追求する装置であり、それゆえ国家の維持は、暴力によるのであり、その本質は抑圧と支配にあるとプラトンが考えていたことになる。この場合、暴力とは、プラトン『国家』（375C）にも書かれているように、イスが《仲介者》として、管理対象である家畜群に対して行使する強制的な物理力なのである。

2. ソクラテスの牧夫・ヒツジ論

これに対して、ソクラテスもまた、「羊飼いの仕事は、ヒツジのために最善をはかることだ」と牧夫・ヒツジの議論で応酬する。

「いいかね、トラシュマコス、さっきの議論の一部始終を考えてみよう。君は最初、自分が『医者』と言うのはほんとうの意味での医者のことだと言葉を規定しながら、あとになって〔『羊飼』〕のことを論じるときには〕もはや、そのほんとうの意味での羊飼いという意味を厳密に守る気はなかった。そして羊飼いが羊飼いであるかぎりにおいて、羊たちを肥らせるのは、けっして羊たちの最善を目標にしてではなく、いわば宴会に招かれて饗応にあずかろうとする人か何かのように、楽しみ食らうことを目当てにしてのことだと思っている。あるいは、商売人であって羊飼いではないかのように、売って儲けることを目当てにしてのことだと思っている。

けれども、羊飼いの仕事にとっては、定められた自分の相手のために最善をはかってやることだけが、ただひとつの関心事であるはずだ。なぜなら、いやしくもそれが〈羊飼術であること〉において何ひとつ欠けるところのないものであるかぎりには、その技術自身の最善のほうは、はじめからじゅうぶんに確保されているはずだからね。

そして、もしそうならば当然、すべての支配は、それが支配であるかぎりにおいては、政治的支配であろうと、個人的生活での支配であろうと、ただもっぱら支配を受け世話を受ける側の者のためにこそ、最善の事柄を考えるものだという事に同意しなければならぬと、こうぼくはさいぜん思っていたのだ」（345C-E）。（プラトン1979a：78-79）

トラシュマコスの牧夫・ヒツジ論に反論するソクラテスは、「医者が患者の治癒を目的に手当てするように、羊飼いはヒツジのために思っている」などと間が抜けたことを言っている。確かに専門家としての医者は患者を邪険にしないが、しかし、羊飼いは自分の家畜群を、普段は丁寧に、心を込めて世話していても、群居性草食動物の家畜化の宿命として、最終的には殺処分する。プラトンが「牧夫・ヒツジのたとえ」をもってソクラテスに語らせた国家論は、「理想的な国家を目指した」と言ってもいいのかもしれないが、その実、欺瞞と言うほかない。プラトンがかくも「間の抜けた」あるいは「欺瞞」とも言える見え透いた議論をソクラテスに語らせたのは、意図的だったはずだが、いかなる意図が隠されているのだろうか。

IV. 二つの統治原理——専制君主的国家と「善き羊飼い」的温情国家

1. 「善き羊飼い」という、幻想

このようなトラシュマコスとソクラテスの議論から、後年、統治形態に関して、二つの類型が設定されてきた。トラシュマコスの議論による国家は、「強者の利益が正義」であり、「国家の統治は、暴力によって実現されており、その本質は抑圧と支配だ」という、専制君主的国家である¹⁸⁾。

一方、ソクラテスの国家論によると、羊飼いはヒツジの生存を保証して、世話している優しい人である。もちろん、(トラシュマコスの言うように)ヒツジを優しく世話しているのは見かけだけであり、現実世界では、羊飼いは最終的にはヒツジを屠畜して消尽する。羊飼いの温情は偽善にほかならない。

つまり、ここで、(1) 専制君主的国家、(2) プラトンの温情国家、という国家統治に関する二つの解釈が生じたことになる。オーストラリアの現代哲学者ジョン・パスモア(1914-2004年)は、聖書とプラトン『国家』を引き合いに出して、統治に関する二つの解釈について語っている。

そこで人間の支配に関する旧約聖書の見解には二つの解釈が可能となる。第一の解釈は、人間はトラシュマコスのような支配者、つまり専制君主であり、儲けを目当てにしてのみ、神が人間の意に服せしめたこの世界の世話をみようというもの。第二の解釈はプラトンのような羊飼いに似て、かれはかれの支配を受ける生き物をそれ自体のために世話をみる。しかも「手荒

18) 「このトラシュマコスによって説かれた正義の論理こそ、一般の国家社会のレジームを基礎づける最初の基本的な原理であることもまた確かであろう。というのも、すでにみたとおり、レジームの最初の成り立ちには、強者による暴力が入り込まざるをえないからである。プラトンがあえて、このトラシュマコスを登場させたことから、政治的共同体にとって欠かすことのできない本質が、抑圧と支配にあることを彼が理解していたということが分かるだろう」(早瀬 2012: 182)。

く、きびしく」統治するのではなく、主人のために最良と思われる状態でそれらの生き物が保存されることを願い、そしてかれらの最終的な運命は主人の手にのみ収められていることをわきまえ知っている良き羊飼いのやりかたで統治するのである。聖書の見解に対するこれら二つの解釈のうち、最近では後者のほうが支持を受けるようになってきている。けれども人間には絶対専制君主的な支配権が与えられているという第一の解釈は、長い間優勢をきわめてきた。批評家たちが「キリスト教の尊大さ」を非難するときに頭に描くものはこれであり、またそこにかれらは西欧人による自然酷使の源泉を見出しているのである。そこでわれわれは、いましばらくこの第一の解釈にかぎって考察を進めていくことにしよう（パスモア 1998：11-12）。

しかし、そもそもプラトンの牧夫、すなわち、家畜群をそれ自身のために世話をして、優しく接するという、「善き羊飼い」というべき統治者、このような解釈が成り立つのだろうか、いかなる状況下に、かかる「善き羊飼い」が想定されているのだろうか。

2. 背後にある二つの初期遊牧組織——セム系とインド・ヨーロッパ語族系

さらに、パスモアは、この「トラシマコスとソクラテスの議論」について、この議論には「決定的なあいまいさがある」と述べている。

人は自分の羊と自分の家畜の世話をすべきであることも明らかにされている。「箴言」第21章10節には、「正しい人はその家畜の命を顧みる」とある。その群れには「乏しいことがない」と謳われた良き羊飼いのイメージは、預言者エゼキエルの場合のように、ごく自然に詩篇記者の口元に浮かび上っている。初期のキリスト教美術は、イエスを十字架にかけられた神として描くよりも、あるいはビザンチン様式における冠をいただいた皇帝として描くよりも、むしろ羊飼いとして——詩人オルペウスがルートの音色に動物たちを酔いしれさせた如くに、時にはそれよりも一層印象的に——描いているのである。

けれども、この羊飼いの類比には決定的なあいまいさがある。プラトンの対話篇『国家』のなかでソフィストのトラシマコスは、良き支配者はいつでも被支配者の利益のために専念するというソクラテスの考えを批判して、羊に対する羊飼いの場合を類比としてとりあげている。「ほかでもない、あなたは羊飼いや牛飼いが羊や牛たちのほうのためをはかる者などと考え、かれらが羊や牛を肥らせ世話することの目的は、主人の利益や自分自身の利益とは別のところにあるなどと思いこんでいなさる」とトラシマコスは冷笑的に述べる。これに答えてソクラテスは、羊の利益を守ることがだけが本当の意味での羊飼い術というものであり、その羊を売って儲けようとするのは羊飼いが羊飼いであるかぎりの者ではなくなって

いるときのことなのだと論じる。そして支配者の術についてもこれと同じことが言えると言う。支配者であるかぎりの支配者の術は、「もっぱら支配を受け世話を受ける側の者のためにこそ最善をはかることなのだ」（プラトン『国家』第1巻343b, 345c）と。自分自身は養ってもその群れは養わなかった「イスラエルの羊飼いたち」——ユダヤの王たち——に主なる神が怒りをこめて語ったというエゼキエルの預言のことばは、この精神を余すところなく伝えている。「あなたがたは脂肪を食べ、毛織物をまとい、肥えたものをほふるが、群れを養わない。あなたがたは弱った者を強くせず、病んでいる者をいやさず、……かれらを手荒く、きびしく治めている」（パスモア 1989：11-12）。

パスモアは、この「羊飼いの類比には決定的なあいまいさがある」と言うが、そうではない。実はこの背景にあるのは、曖昧さではなく、「2種類の仲介者」による2種類の遊牧民組織である。ソクラテスの議論は、去勢ヒツジ・ヤギを《仲介者》に持つセム系の遊牧民組織に当てはまる。その一方で、トラシユマコストラスィマコスの牧夫・ヒツジ論こそ、イヌを《仲介者》に持つインド・ヨーロッパ語族系の遊牧民組織に当てはまる。

大規模な家畜群を取り扱う牧畜において、とりわけ、遊牧においては、家畜群を制御するために、イヌや、去勢ヒツジ、ヤギなどの訓練された動物を活用する。牧夫（羊飼い）の手助けをするこれらの動物を《仲介者》と呼んでいる。牧夫を補助するこれらの動物は数匹であり、牧夫が数百頭にも及ぶヒツジなどの家畜群を制御することが、彼ら《仲介者》によって可能になっている¹⁹⁾。

《仲介者》の種類によって、二種の組織ができる。その際に、統治の型として、牧夫・ヒツジ関係に準えると、統治形態に二つの型が生まれる。

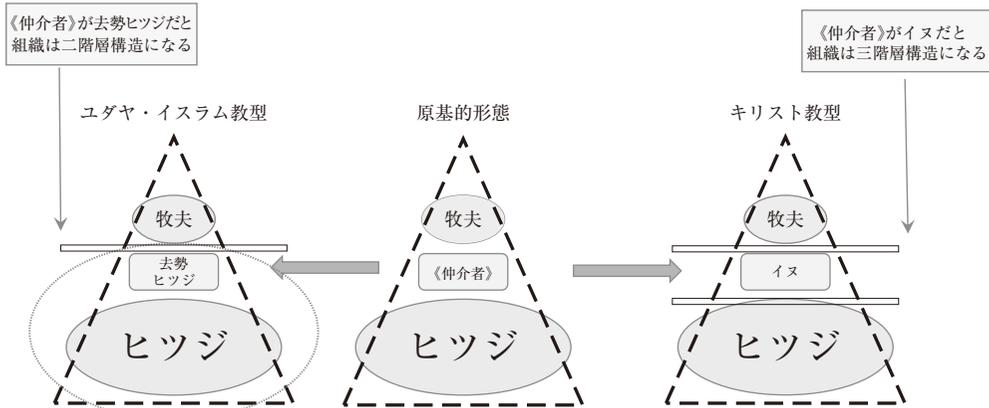
図1「遊牧組織における《仲介者》」に図式化した²⁰⁾が、《仲介者》が去勢ヒツジ・ヤギであると、ヒツジからなる家畜群ともともとは出自が同じなので、《仲介者》（去勢ヒツジ・ヤギ）と家畜群（ヒツジ）が合同して、同じ動物のカテゴリーをつくる。この型の組織の場合、《仲介者》は自律した存在ではない。従って、この型の組織では、牧夫とその家族というヒトに対峙するのは、家畜群と《仲介者》からなるヒツジの群れである。全権を握る神のごとき牧夫に対して、家畜群は、その権力によって、なすがままに翻弄される。これが、図1の左側のユダヤ・イスラム教型の組織であり、社会は二階層構造になる。

この組織では、牧夫は「善き羊飼い」として、去勢ヒツジ・ヤギに指示を出すと、これらの《仲介者》は牧夫の言うままに動き始める。ヒツジなどの家畜群は付和雷同性が高いので、去勢ヒツ

19) 《仲介者》の意義については、ここでは詳しく書けないので、中川（2017d：106-123）第2部第3章「《仲介者》という組織編成史上最大の革新」を参照いただければ幸いである。

図1 遊牧組織における《仲介者》

——去勢ヒツジか、イヌか——



出所) 中川洋一郎 (2017) 『新ヨーロッパ経済史Ⅰ—牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社, p. 108.

ジ・ヤギが誘導者となって、群れ全体が誘導者に付き従う形で動き始める。かくて、この型の組織では、のんびりとした「善き羊飼い」と、誘導者の後を静々と追う大規模なヒツジの群れという、のどかな光景が出現する。かくて、去勢ヒツジ・ヤギを《仲介者》とするユダヤ・イスラム教型の組織で、「すべての支配は、それが支配であるかぎりにおいては、政治的支配であろうと、個人的生活での支配であろうと、ただもっぱら支配を受け世話をされる側の者のためにこそ、最善の事柄を考えるものだ」（ソクラテス）という、よく言えば理想的な、しかし、悪く言えば幻想的な統治原理が想定されるのである。

このように、去勢ヒツジ・ヤギを《仲介者》に持つユダヤ・イスラム教型の組織が、「善き羊飼い」という、温情的な牧夫像を生んだ。旧約聖書・新約聖書（少なくとも、その主要部分）は、ともに、ユダヤ人という、セム系の人々によって書かれた。聖書に盛られた《仲介者》は、あくまでも「ユダヤ・イスラム教型」である。《仲介者》たる去勢ヒツジは、あくまでも「同輩中の第一人者」として、群れの先頭に立ち、付和雷同をその性格とする烏合の衆である群れのヒツジたちは、リーダーたる《仲介者》である去勢ヒツジについて行く。統治者である牧夫もまた、穏やかで、ゆるゆると山道を歩き、去勢ヒツジ・ヤギの《仲介者》を先に行かせて、家畜をいたわりつつ、ヒツジたちの世話をを行う。このイメージが、プラトンの温情国家に結実した。

ゲルマン人の有力な一派であり、ガリアに定着したフランク族が、やがてフランク王クロヴィスの改宗（496年）をきっかけに、キリスト教（カトリック）に転向したこと、そこに、歴史上の重大な齟齬が生まれた。確かに、インド・ヨーロッパ語族に属するフランク族は、キリスト教に転向したことで、旧約聖書・新約聖書を、自分たちの聖書として採用して、「我々は一神教徒になり、聖書の言葉は神の言葉なので、絶対だ」と考えるようになった。しかし、聖書には、《三区

分イデオロギー》という思想はない。《三区分イデオロギー》の起源は、すでに見たように、別の所、すなわち、三階層型の初期遊牧組織にある。

その結果、集团的共有観念としての《三区分イデオロギー》を自らの思想的核に据えるゲルマン人たちは、その実、二つの聖書に盛られた神の像を、すなわち、セム系の神の概念を引き継いではいなかったのである。キリスト教に転向したゲルマン人たちは、先に見た図1の右の三角形に盛られた三階層構造（キリスト教型）を信奉していたのであるから、イエス・キリストを「真の《仲介者》」とみなす三位一体の神学を受容したことこそ、理に適っていた。その結果、言っていること（「ヒトを含めて、この世界はすべて、唯一かつ全能の絶対神によって支配されている」）と信じていること（神であり、ヒトであるイエスを信じれば、キリスト教信者は救われる）が矛盾する事態に陥ってしまったのである。

3. 暴力による抑圧と支配という統治原理

一方、《仲介者》がイヌだと、家畜群と《仲介者》は全く別の動物のカテゴリーを形成する。イヌはもともとオオカミであり、オオカミはヒツジにとってそれは恐ろしい捕食者だからである。捕食者と被捕食者が同じカテゴリーを形成するのは想像だにできない。《仲介者》がイヌだと、牧夫に対して、家畜群の他に、《仲介者》も対峙しており、詰まるところ、この組織では、図1の右側のキリスト教型の組織になる。この組織では、社会は三階層構造になる。この遊牧組織では、ヒツジたちは、恐ろしい捕食者を祖先に持つイヌに追い立てられて、恐怖に駆られて統御されるのである。イヌは、ヒツジにとっては、それはそれは恐ろしい捕食者である。敵対関係にあるのだから、「同輩中の第一人者」などという形容は、夢のまた夢。まさに、暴力による統治と言うべき専制君主制の体制である。すなわち、イヌを《仲介者》に持つインド・ヨーロッパ語族型の組織が、厳しい抑圧と制裁を事として、暴力をもって統治する専制君主制の牧夫を生んだ。

三階級構造の中で、きわめて重要な位置を占める《仲介者》、すなわち、イヌのことを次のように論じることで、プラトンは、トラシュマコススの口を借りて、《三区分イデオロギー》の核心を語っている。

「では逆に、自分が不正なことをされていると考える場合はどうだろう？ そのような場合には、その人は心を沸き立たせ、憤激し、正しいと思うことに味方して戦い、飢えても、凍えても、その他すべてそのような目にあっても、じっと堪え忍んで、勝利を収めるのではないだろうか。そして、目的を達成するか、それとも斃れて死ぬか、それとも、ちょうど犬が羊飼いかから呼び戻されるように、自分の内なる理性によって呼び戻されて宥められるかするまでは、その気だかい闘いをやめようとはしないのではなからうか？」

「あなたのその譬えは、まったくぴったりです」と彼は言った。「じっさい、われわれの国

家においては、補助者たちはいわば番犬のように、国家の羊飼いともしべき支配者たちの命に従うというふうには、われわれは考えたのですからね」（440C-D）。（プラトン1979a：358）

プラトンは、ここで、国家という組織全体の管理こそ、「守護者」（つまり、牧夫）に任せるべきだと、ソクラテスに言わせている。

「それでは、いま言ったような人たちをこそ、外からの敵に対しても、内なる同胞に対しても、後者には害をなそうという気持を起させないように、前者にはそれができないように国を守るところの、全き意味での〈守護者〉と呼ぶのが、真に最も正しい呼び方ではないだろうか。そしてこれに対して、われわれがこれまで守護者と呼んできた若者たちは、支配者たちの決めた考えに協力する〈補助者〉であり〈援助者〉であると呼ぶのが、正しいのではないかね？」

「たしかにそれが、正しい呼び方だと思います」と彼は答えた（414b）。（プラトン 1979a：278）

初期遊牧組織における三階級構造、特に《仲介者》の事例として格好の記述となっている。ここでは《仲介者》の役割を改めて認識するとともに、「守護者の仕事は全体を見ることだ」（421b）と規定して、国家における守護者、つまり、牧夫の機能を規定している（沼田 1983：33）。

〔国家論一卷と二巻は時期的に異なる成立年代か〕かかる憶測の正当性については専門家の判断をまたなければならないが、少なくとも指摘さるべきは、第一においては「味方には益、敵には害」という正義観が、味方であれ敵であれ、これを害することは正義に背くという、いわば山上の垂訓的なモラルによって否定されている（335 d～e）のに対し、続く第二巻においては「理想国」の軍人には「犬」の如き性格が求められ、「同胞には柔和、敵には苛酷たるべし」と説かれていることである（375 c）。前者が普遍人類的な「開いたモラル」であるのに対し、後者は団体エゴイズムに立つ「閉じたモラル」であることは明瞭であり、変り身の早い日本知識層なら兎も角、プラトンにおいてかかる変化が一朝一夕に生じたとは、筆者には信じ難い（長尾 1966：114）。

インド・ヨーロッパ語族民こそ、初期遊牧において、イヌを《仲介者》として活用した人々であった。だからこそ、《三区分イデオロギー》が生成し、インド・ヨーロッパ語族民の間での部族の共有観念となったのである。上記の文で、「『理想国』の軍人には『犬』の如き性格が求められ、『同胞には柔和、敵には苛酷たるべし』と説かれている」（『国家』375 c）ので、遊牧組織における《仲介者》は、この場合、イヌであり、第二階級の人々はイヌのような気概を持つべきことが求め

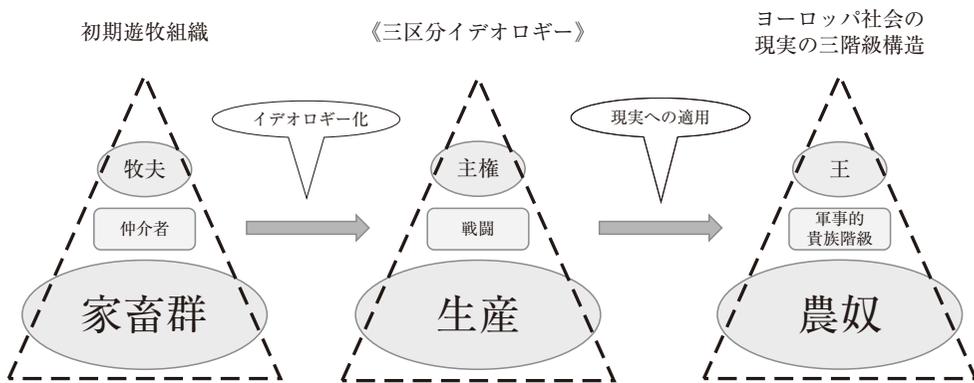
られている。「牧夫としての政治家」という発想を持っていたプラトンは、インド・ヨーロッパ語族民に固有の《三区分イデオロギー》を基礎として、国家統治を構想していたのである。

V. 《三区分イデオロギー》の現実への適用としてのプラトン『国家』論

1. 《三区分イデオロギー》の生成から適用へ

初期遊牧組織における三階級構造が、《三区分イデオロギー》の現実的な基礎であり、また、統治原理の形成へと発展した。そもそも、プラトンの著作『政治家』にも、Statesman as a Herdsman (牧夫としての政治家) という、発想がある (MERRIL 2003)。遊牧という生業における牧夫の役割こそ、プラトンにとって政治家のひな形になったうえに、国家統治の理論形成の礎となった。図2に見るように、初期遊牧組織を基礎に形成された《三区分イデオロギー》は、インド・ヨーロッパ語族民がステップから出て、他地域に侵攻した際に、実際の支配体制を構築する上でのモデルとなっていたと言えるだろう。

図2 《三区分イデオロギー》の生成と現実への適用



出所) 中川洋一郎 (2017) 『新ヨーロッパ経済史Ⅰ—牧夫・イス・ヒツジー』学文社, p. 139.

プラトン自身、折に触れて、統治者の心がけ、さらに、第二階級の気概などを語っていた。そうだとすると、彼に《三区分イデオロギー》を国家の統治原理として適用しようという意図があったのだろうと想像するのが自然である。

2. ギリシャへの《三区分イデオロギー》適用の難しさ

しかし、それにしても、《三区分イデオロギー》が生成してからプラトンの時代まで、およそ3000年が経過していたので、《三区分イデオロギー》の適用には、難しい問題があった。

《三区分イデオロギー》は、前4千年紀頃に初期遊牧組織における三階級構造を起源とし、かつ、背景としていた。しかし、前1千年紀のギリシャでは、もはや家畜化した際に使用した暴力

をふるって、《ヒツジ》を押さえつけて統治するような状況ではなく、《三分区イデオロギー》をそのまま粗野な形態では、現実へと適用できないことは明らかであった。原初的な形態における《三分区イデオロギー》とは、前4000年頃に生成された初期遊牧組織における三階級構造を反映した神々の三機能構造である。かかる即自的な形態がそのまま異民族統治に適用できるはずはない。原初的な《三分区イデオロギー》では、ギリシャの現実的な国家には、もはやそのままの原初的な形態では適用できなくなっていた。

何よりも、ギリシャには、メソポタミアで開始された農牧文明が早くも前6000年頃から伝わり、非インド・ヨーロッパ語族民が当時としては先進的な文明を営んでいた。遠く黒海カスピ海北方ステップから進攻してきたインド・ヨーロッパ語族民は、先進的な先住民たちに比べると、文化的には、むしろ遅れていた。

さらに、この地域での牧畜は、広範な草原地帯を遊動する遊牧民型というよりは、むしろ、半定住の移牧が盛んであった。ギリシャは、そもそも去勢ヒツジ・ヤギを《仲介者》とするユダヤ・イスラム教型の地域である。ギリシャの移牧民たちは、もちろん、《仲介者》としてイヌを活用することもあったが、むしろ、去勢ヒツジ・ヤギを誘導者に仕立てて、《仲介者》としていた。この点からも、《三分区イデオロギー》をそのまま適用できなかった。

プラトンが《三分区イデオロギー》を保持して、それをもって国家を論じようとしていたのは間違いないが、《三分区イデオロギー》のギリシャへの適用に際しては、それ相当の変容を《三分区イデオロギー》に加えざるをえなかったはずである。《三分区イデオロギー》は、その生成から3000年ほど経過して、2000キロほど離れたヘラス（ギリシャの古名）の地で、西洋哲学の祖のひとり、プラトンによってそれ相応の変容を遂げたのである。

3. 調和を実現するという、アイデアの実現

当時のギリシャは先進地域ではあるが、ペロポネソス戦争という混乱を経験した時期にあった。ペロポネソス戦争後において、国家の不安定化が増大し、知識人たちの困窮が増した。当時の政治家や哲学者にとっての課題こそ、「いかにして、国家を建設するのか」であった。

長尾竜一は、プラトン『国家』でのトラシュマコスの議論（375c）を取りあげて、「軍人はイヌたるべし」と書かれた箇所を指摘して、イヌを《仲介者》とした（インド・ヨーロッパ語族民に固有の）組織編成原理に言及している。その上で、きわめて興味深い議論を提示している。長尾によると、プラトンは、現状の国家である悪しき現実に対して、「かかる悪しき現実に対立する価値体系としてのアイデア論に基づく理想国家を描き、自らをその哲人支配者に擬し、終生かかる理想国家の実現を待ち望んでいた」²⁰⁾。

20) 「名門の家に生まれ、稀有の才能に恵まれ、また最高の教育をうけ、人一倍の権力意志をも具有して

そこで、プラトンは、理想の国家「真の正しき哲学者が国家の支配の座に就く」(*Epistl.*xii, 326 a~b)を想定した。

この「理想国」における支配者と被支配者との関係は医師と患者、危難時における船長と乗客(注52)、更には牧夫と家畜(注53)に喩えられる。これによって支配者が被支配者の意志を一切無視することが正当化されるのである。《臣民が好むか好まないかというようなことは何の相違ももたらさない。彼等の支配は法によってもよいし、よらなくてもよい。……ちょうど医師の場合と同様である。医師が我々を切り、焼き、その他痛い目にあわせることにつき、我々が好もうと好むまいと医師の評価にかかわりはない。また予めきめた療法によろうとよるまいと医師は医師である》。……

(52) *Politicos*, 289 a *et seq.* それ故民主制は無智な船頭が舵をとることだとされる (*Politeia*, 488 b *et seq.*)

(53) 統治は「動物飼育術」の一種として定義される (*Politicos*, 267 b)。《人間はいわば家畜であって、よき天性に恵まれ、適切な教育を施せば、神的にして御し易い生き物となる。しかしその教育が不充分不適切であるならば、大地の産み出したもののうち最も粗暴なものとなるであろう》(*Nomoi*, 766 a)。(長尾 1966 : 122)

プラトンは、イデア(そこは調和の世界)を追究する過程で、国家統治という課題に取り組んだのである。かかる前提で、プラトンは《三分イデオロギー》をギリシャの現実へと適用することを試みたのである。

おわりに——調和の実現こそ、プラトンにとって「正義」であった

すでに見たように、戦争で荒んだアテナイという国家を立て直すことが、プラトンの願いで

いたプラトンはかかる幻滅と挫折によって一応現実に向背したのである。心理学的にみて当然のことであるが、プラトンはかかる挫折の補償(compensation)として現実の価値を強く否定し、現実を支配する価値基準と全く異なった価値基準を樹立し、自らをその価値体系の頂点におくことによってその心理的優越性を保持しようとしたのである。彼は『すべての国で悪政が行なわれている』(*Epistl.* vii, 326a)。『現存の国制のうち哲学的本性に適するものは一つもない』(*Politeia*, 497b.)、『この国には政治家としてすぐれた者も一人も居なかった』(*Gorg.* 517a.)といい、更に自らの心境をのべて曰く、……[*Politeia*, 496 d~e の引用はいる]しかしプラトンがかかる閑居に甘んじた訳ではもとよりない。彼がかかる悪しき現実に対立する価値体系としてのイデア論に基づく理想国家を描き、自らをその哲人支配者に擬し、終生かかる理想国家の実現を待ち望んでいたのである。しかもプラトンの現実否定の烈しさに対応して、彼のもたらそうと欲した改革もまた苛烈にして仮借なきものであった」(長尾 1966 : 111)。

あった。それを前提にして、政治と国家に関する議論では、プラトンもまた、牧夫・ヒツジという、初期遊牧組織における三階級構造が念頭にあったのは、明らかであろう。すなわち、プラトンは、国家には三階級が存在して、それぞれ全く異なる機能を持ち（分離排他性）、全体で完成した一体性を持つてはいる（相互補完性）が、厳然たる上下関係にある（上下階級性）と、繰り返し主張していたのであるから、《三分区イデオロギー》を拠り所にしてはいたのは、ほぼ確実であろう。

しかし、依然として、「では、それらの相互に排他的な三階級をいかにして調和させるのか」という難題が残ったままであった。この難問が未解決である以上、《三分区イデオロギー》をそのまま、粗野な形態でギリシャの現実へと適用することは不可能であった。この点について、沼田裕之は、トラシュマコス議論には、調和が欠けていたと述べている。

さて、トラシュマコスによる正義の定義の内容を調べてみると、ここにも、実は、或る“全体の調和”“共通性への指向”といったものが欠けていることに気付く。(イ)は始めから、或る集団の中に強者、弱者の二つの対立する部分が在ることを予想している。トラシュマコスが嫌々ながら認めさせられるように、「正義は協調と友愛を作り出すもの」(351d) だとしたら、強者と弱者に分裂してしまう傾向がある集団の中に、正義は見つけにくいことになる。ソクラテスは「<正しいこと>が利益になることだという点は、このほくも賛成するが、君はそれにつけ加えて、その利益というのは強い者の利益のことである、と主張している。この点が、ほくにはわからない」(339b)、と述べて、この問題点を指摘することになる。そこで、トラシュマコスは自分の意見を幾分変えてみるが(340e-341a, 343b)、結局、一つの社会に二つの利益の相反する部分が敵対して存在する、という根本点を改めない限り、彼には勝目はないのである(沼田1983: 27)。

はたして「勝ち目がない」かどうかは、わからない。重要な点は、トラシュマコスの主張は《三分区イデオロギー》に即した議論であること、しかも、この時点で、それでは「調和がないから不十分だ」とプラトンが考えていたことである。もとより、「一つの社会に二つの利益の相反する部分が敵対して存在する、という根本点」は、《三分区イデオロギー》の「三機能の分離排他性」という視点からすれば当然の性質であり、改めようとしても改まる性質のものではない。インド・ヨーロッパ語族民の諸社会を構成する三階級は、分離して、互いに排他的に存在するのであるから、「一つの社会に二つの利益の相反する部分が敵対して存在する」のは、当たり前の事態である。プラトンは国家統治という観点から議論していたのであり、トラシュマコスの議論には「調和」が欠けているというプラトンの認識は、《三分区イデオロギー》が想定する「三機能の分離排他性」を超越したところでの調和を模索していたことの証左だと考える。このような調和は、いかにして可能となるのか。

それが、プラトンが追究していた「正義」ではなかったかと思う。プラトン『国家』においては、四つの徳が謳われている。それらのうち、知恵・勇気・節制の三つは、それぞれの三区分に固有の徳であるが、最後の「正義」こそ、全体を俯瞰し、管理し、全体の調和をめざす機能である。「正義」は、第四の徳であり、その内容は、確かに調和である。廣川洋一の議論によると、まさに正義こそが「魂全体の調和」をもたらす原理だという。

正義が他の三徳にくらべてより基本的なものとされたのはいかなる意味においてであろうか。節制が魂の三部分それぞれにおける知恵と勇気の協調と調和の原理として、三部分それぞれの内部に調和をもたらしたのにたいして、正義は、各部分が基本的に他の部分と異なる存在として、その固有の務めを認識させ遂行させながら、いわばその区別立てにおいて、三つの部分の相互間に、つまり魂全体に調和をもたらす原理とみられている。それは、三部分の間に協調と友愛を与えることによって魂全体を調和あるものとする原理なのである。正義は基本的には友愛と調和の原理として節制とほぼ同一の働きをもつものとみられるが、節制が魂あるいは国家の各部分内の知恵と勇気の間に調和をもたらすものであるのにたいして、正義は、その三つの部分の間に調和を与えるものとして、この意味においてより全体的な、より根本的な原理ということができるようと思われる（廣川 1987: 109）。

プラトンによると、神のごとき《製作者》がアイデアをつくり、この世を創造した。だからこそ、この世は美しいし、秩序が保たれている²¹⁾。彼においては、この世界の完結性が強調されている。中でも、最も重要な概念は秩序・統合である²²⁾。それこそプラトンが定式化した概念であるが、か

21) 「製作者は優れた善きものであり、彼はすべてのものが自分自身によく似たものになるように望んだ。これこそが生成界と宇宙との最も決定的な始原である。神は、すべてが善きものであり、劣ったものが一つもないことを望み、このように可視的なものすべてを受け取ったのだが、それは無秩序に動いていたから、これを無秩序な状態から秩序ある状態へと導いた (29E ~ 30A)。

製作者は、どれもが完全なすべての材料から、一つの全体性を備えて完結した、不老無病のものとして、この宇宙を製作した (33A)。

製作者は、原因となるもののうち最善のものであるから、その作品も最美なものである。宇宙は、およそ生成されたもののうち最善にして最美なものである。ここではプラトンの宇宙賛美が言葉を尽くして語られている。宇宙に秩序を与えたのは神である。宇宙がこれほど美しいのは、秩序が存在するからである」(山川2007: 172)。

22) 「宇宙全体には秩序が遍く行きわたっている。ギリシア語では、宇宙も秩序も同じ『コスモス』という語で表される。天体が規則正しく運行し、そのおかげで植物が生育し、その植物を食べて動物は命をつなぐ。なぜ宇宙はこうになっているのか。偶然こうようになったのだろうか。否、計画的に創られたとしか思えないではないか。……『国家』において、秩序の根本原理が理性であるということを示した。このことは『ティマイオス』への重要なステップであった。万有の始原から現象界まで、実在のフュシスの結びつきを全体的に俯瞰することをもって学の完成と看做すプラトンには、この後

かる秩序・完結性は、どこから来たのであろうか。《三分区イデオロギー》によれば、調和、すなわち秩序形成は、もともとこの世のあり方である。しかし、初期遊牧三階層構造を起源とする《三分区イデオロギー》における秩序形成は、第二階級たる《仲介者》（イヌ）の暴力による《ヒツジ》たちへの強権的な支配によって保たれていた。「調和している」とはいえ、前1千年紀のアテナイのような先進文明圏では、このような粗野な形態の統治は、もはや通用しなくなっていた。プラトンは、国家の統治原理として、《三分区イデオロギー》を当時のギリシャの現実に応用するために、国家を大きく超えるアイデアの中で調和を構想していたのではないか。その実現こそが、「正義」であると考えていたのではないだろうか。

参考文献

- 生島幹三（1965）「プラトン『国家』A巻におけるトラシュマコスとソクラテスの論争の意味について」『西洋古典学研究』13：87-97.
- 岩田拓郎（1991）「Dipoliastai（ディーポリアスタイ）について（上）：古代アッティカの牧牛者集団」『北海道大学文学部紀要』39（3）：39-84.
- （1993）「Dipoliastai（ディーポリアスタイ）について（中）：古代アッティカの牧牛者集団」『北海道大学文学部紀要』41（3）：1-81.
- （1994）「Dipoliastai（ディーポリアスタイ）について（下）：古代アッティカの牧牛者集団」『北海道大学文学部紀要』42（3）：1-81.
- 小川隆雄（1986）「政治権力は悪であろうかトラシュマコス君—プラトン『国家』第1巻336B1～347E2—」『島根大学法文学部紀要. 文学科編』9（1）：35-70.
- 奥田和夫（1996）「『強者の利益』 プラトン『国家』第一巻におけるトラシュマコス説とその背後にある思潮—解釈の基本的視点—」『法政大学文学部紀要』42：23-44.
- 河口明人（2011）「健康概念の起源について：古代ギリシャ世界における身体と生命Ⅲ. 祭典の思想と生存の意志」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』112：1-26.
- 河崎靖（2004）「比較言語学と比較神話学 その1」『ドイツ文学研究』49：69-79.
- （2005）「比較言語学と比較神話学 その2」『ドイツ文学研究』50：123-135.
- （2006）「比較言語学と比較神話学 その3」『ドイツ文学研究』51：39-50.
- ギンブタス（1998）『古ヨーロッパの神々』（鶴岡真弓訳）言叢社、313.
- 久保徹（1997）「プラトンのエロース論（Abstract）」京都大学.
- 栗原裕次（2008）「プラトンの人間論への接近：『国家』篇第1巻346e3-347e2（fulltext）」『東京学芸大学紀要. 人文社会科学系』II（59）：83-92.
- シュタイナー、ルドルフ（2009）『社会の未来』（高橋巖訳）春秋社、223.
- 瀬口昌久（2014）「第6章 国家」内山勝利編『プラトンを学ぶ人のために』世界思想社、191-209.

人間を含む宇宙全体を考察することは不可欠のことだったのである。……宇宙は感覚によって捉えられるものだから、生成したものである。それは、ロゴスと知性によって把握され同一であり続けるもの、すなわちアイデアを範型として製作されたという。生成された宇宙万有には、生成の原因としての製作者が存在する。製作者が可視界にあるものをモデルとして製作するならば、作品は美しいものになる。製作者が知性界にあるもの、すなわちアイデアをモデルとして製作するならば、作品は美しいものになる。この宇宙は知性界をモデルとする似姿だから美しいのである」（山川2007：172）。

- 高橋康造・内海隆 (2011) 「教師論の過去と現在 その2 —ソクラテス」『八戸工業大学紀要』30: 15-26.
- 田崎三郎 (2011) 「『三』の研究」『松山大学論集』(23) 3: 4-34.
- 谷泰 (1997) 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界—』平凡社, 396.
- デュメジル, ジョルジュ (1987) 『神々の構造—印欧語三区分イデオロギー—』国文社, 218.
- 長尾竜一 (1966) 「『ポリティア』のトラシュマコス—古代ギリシャにおける政治的シニズムの一考察」『社会科学紀要』15: 93-126.
- 中川洋一郎 (2017a) 「地球環境の悪化とユダヤ・キリスト教の人間中心主義—文明の(だが、同時に環境破壊の)起源としての遊牧—」『経済学論纂(中央大学)』57(3・4): 333-362.
- (2017b) 「群居性草食動物家畜化の衝撃—輪廻転生観の破壊という、人類史上の分水嶺—」『経済学論纂(中央大学)』57(5・6): 257-284.
- (2017c) 「フランスにおける職務間の『隙間』—1990年代初頭、現地日系メーカー日本人幹部による評価—」『中央大学経済研究所年報』49: 435-458.
- (2017d) 『新ヨーロッパ経済史Ⅰ—牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社, 243.
- (2017e) 『新ヨーロッパ経済史Ⅱ—資本・市場・石炭—』学文社, 308.
- 長友敬一 (2006) 「理性としての感情: プラトン『国家』篇での魂の三区分説に関して」『哲学論文集』九州大学哲学会, 42: 119-137.
- 中畑正志 (1992) 「プラトンの『国家』における〈認識〉の位置—魂の三区分説への序章—」『西洋古典学研究』40(0): 44-56.
- 西尾浩二 (2002) 「『強者の思想』: プラトン『国家』におけるトラシュマコス説」『古代哲学研究室紀要』京都大学, 11: 24-39.
- (2003) 「プラトン『国家』における『魂の三区分説』」『アルケー』関西哲学会, 11: 93-103.
- (2007) 「プラトンの人間論: 『国家』論考 (Abstract 要旨)」京都大学.
- 沼田裕之 (1983) 「『国家』に於けるプラトンのロゴスの普遍性について」『東北大学教育学部研究年報』31: 1-48.
- 早川量介 (2005) 「プラトン『国家』魂三区分説における理性的判断と下位部分の位置」『中部哲学会年報』38: 106-115.
- 早瀬善彦 (2012) 「レオ・シュトラウスのレジーム論—哲学と政治社会についての考察—」『人間・環境学』21: 175-190.
- パスモア, J. (1998) 『自然に対する人間の責任』(間瀬啓允訳) 岩波書店, 349.
- バンヴェニスト, エミール (1986) 『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集Ⅰ』(蔵持不三也ほか訳) 言叢社, 387.
- (1987) 『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集Ⅱ』(蔵持不三也ほか訳) 言叢社, 379.
- 廣川洋一 (1987) 「国家と魂のいわゆるアナロギア—について—プラトンの思考のある仕方を中心に—」『東海大学紀要文学部』47: 107-116.
- 藤沢令夫 (1979) 「解説」プラトン『国家(下)』(藤沢令夫訳), 岩波書店, 431-493.
- 藤縄謙三 (1975) 「古代ギリシアにおける知識人の経済生活」『京都大学文学部研究紀要』15: 65-118.
- プラトン (1976) 「ポリティコス (政治家)」(水野有庸訳) 『プラトン全集3』(田中美知太郎・藤沢令夫編) 岩波書店, 488.
- (1979a) 『国家(上)』(藤沢令夫訳) 岩波書店, 509.
- (1979b) 『国家(下)』(藤沢令夫訳) 岩波書店, 493.
- ホワイトヘッド, A. N. (1979) 『過程と實在』(山本誠作訳) 松籟社, 410.
- リトルトン, C. S. (1981) 『新比較神話学』(堀美佐子訳) みすず書房, 381.

- リュコス, キモン (1992) 「トラシマコスの正義および権力論—およびその解釈上のいくつかの問題点—」(小川隆雄訳)『鳥根大学法文学部紀要. 文学科編』17 (1) : 65-89.
- 山内友三郎 (1970) 「プラトン『国家』における魂の本性—ハルモニアとプロネーシス—」『大阪教育大学紀要』第1部門, 19 : 39-53.
- 山川明子 (2007) 「小宇宙としての個—プラトン『ティマイオス』のコスモゴニー」『人間文化創成科学論叢』御茶ノ水大学, 10 : 169-176.
- (2008) 「魂における「気概」の位置 : プラトン「魂の三分説」をめぐって」『人間文化創成科学論叢』御茶ノ水大学, 11 : 89-95.
- 和田正美 (2014) 「ソクラテスの倫理・教育思想 : ソクラテスについて」『関西国際大学研究紀要』15 : 149-162.
- ALLEN, Nick (1993) 'Debating Dumézil : Recent studies in comparative mythology' *JASO*, 24 : 119-131.
- ANTHONY David W. (2007) *The Horse, the Wheel and Language*. Princeton and Oxford, 553.
- BROUGH, John (1959) 'The Tripartite Ideology of the Indo-Europeans : An Experiment in Method', *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London, 22 (1/3) : 69-85.
- DUBUISSON, Daniel (1975) 'L'Irlande et la théorie médiévale des « trois ordres »', *Revue de l'histoire des religions*, 188 (1) : 35-63.
- (1980) Mythe, pensée et idéologie. *Journal des savants*, 4 (1) : 281-299.
- (1990) 'The Notion of Ideology in the Work of Georges DUMEZIL : A Contribution to a Dumezilian Epistemology', *JASO*, 21/3 : 269-278.
- DUCHSENE, Ricardo (2011) *The Uniqueness of Western Civilization*. Leiden · Boston, 527.
- DUMÉZIL, Georges (2014) *Mythes et Épopées I II III*. Edition Gallimard, 1463.
- (1985) 'Science et politique. Réponse à Carlo Ginzburg. *Annales*', *Économies, Sociétés, Civilisations*. 40(5) : 985-989.
- DEMOULE, Jean-Paul (1991) 'Réalité des Indo-Européens : les diverses apories du modèle arborescent', *Revue de l'histoire des religions*, 208(2) : 169-202.
- GINZBURG, Carlo (1985) 'Mythologie germanique et nazisme. Sur un livre ancien de Georges Dumézil', *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*. 40(4) : 695-715.
- GONDA, J. (1974) 'Dumezil's Tripartite Ideology : Some Critical Observations', *The Journal of Asian Studies*, 34(1) : 139-149.
- LITTLETON, C. Scott (1974) "'Je ne suis pas structuraliste" : Some Fundamental Differences between Dumézil and Levi-Strauss', *The Journal of Asian Studies*, 34(1) : 151-158.
- MALLORY, J. P. (1989) *In Search of the Indo-Europeans*. London, 288.
- MALLORY, J. P. & D. Q. ADAMS (2006) *The Oxford Introduction to Proto-Indo-European and the Proto-Indo-European World*. Oxford, 731.
- MERRILL, Jacqueline P. (2003) 'The Organization of Plato's *Statesman* and the Statesman's Rule as a Herdsman', *Phoenix*, 57(1-2) : 35-56.
- PORTER, Andrew P. and Edward C. HOBBS (1999) 'The Trinity and the Indo-European Tripartite World-view' *Budhi*, III (2-3) : 1-28.
- RENFREW, Colin (1989) 'The Origins of Indo-European Languages', *Scientific American*, 261(4) : 106-115.
- (1990) '*L'Enigme Indo-Européenne, Archéologie et Langage*', traduit de l'anglais par Michèle Miech-Chatenay, in coll. : « Histoires », Paris, 406.
- RIES, Julien (1989) 'L'apport de Georges Dumézil à l'étude comparée des religions', *Revue théologique*

de Louvain, 20^e année, fasc. 4, 1989 : 440-466.

SERGENT, Bernard (1979) 'Les trois fonctions des Indo-Européens dans la Grèce ancienne : bilan critique', *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*. 34 (6) : 1155-1186.

——— (1983) 'Panthéons hittites trifonctionnels', *Revue de l'histoire des religions*, 200 (2) : 131-153.

(中央大学経済学部教授 経済史博)